

## Ⅱ 個別援助計画の普及研修リーダー養成研修



## Ⅱ 個別援助計画の普及研修リーダー養成研修

### 1. 研修の概要

#### (1) 概要

福祉用具個別援助計画を地域で普及するため「リーダー」を養成することを目的とした研修。対象者は、福祉用具専門相談員（各会場約 50 名）。個別援助計画の目的や意義、同計画の作成技術、および、その指導技術を習得してもらい、地域で研修を企画・運営してその普及に努めてもらうことを目指したもの。各都道府県から最低 1 名は研修を受講してもらえるように募集活動を全国的に行った。大阪、東京の 2 会場で実施。

#### (2) 対象

福祉用具専門相談員（各会場 50 名）。地域や職域において、「個別援助計画」の普及研修リーダーを目指す方で、所属事業所の管理者等、または地域の福祉用具の関係団体からの推薦のある方を募集。なお、関係団体については、「定義はないが、研修修了者の活動を支援して頂ける団体等が望ましい」とした。

#### (3) 開催概要

○11 月 19 日大阪会場

講義講師／東 畠 弘 子 氏（国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師）

演習講師／淵 上 敬 史 氏（株式会社ウィズ福祉技術情報支援室課長、作業療法士）

〃 / 一ノ瀬千草氏（総合メディカル株式会社、理学療法士）

協力団体／公益社団法人関西シルバーサービス協会

会 場／大阪社会福祉指導センター

○12 月 10 日東京会場

講義講師／東 畠 弘 子 氏（国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師）

演習講師／成田すみれ氏（社会福祉法人試行会横浜市青葉台地域ケアプラザ所長）

事例説明／花 田 茂 氏（一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会会員）

協力団体／一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会・東京ブロック

会 場／コンベンションルーム A P 渋谷

#### (4) 研修内容の検討

本研修では、「福祉用具個別援助計画書」作成技能を修得し、研修会等の機会にその技能を伝達できる普及研修のリーダーを養成し、もって、同計画書の普及および、義務化に備えてすべての事業所が同計画を「書ける」環境の整備に資する目的がある。これを踏まえ、本研修では、以下の点

に留意してプログラム、教材等を作成した。なお、作成は、全体会議の討議を踏まえ、「研修内容検討部会」がたった。

#### ○「作成」と「指導」両方を兼ね備えたプログラム作成

福祉用具個別援助計画書の「作成」のための、同計画の内容理解、作成技術の習得のほか、受講者が近い将来、研修のファシリテーターの役割を担うことを前提に、研修運営をも学べるプログラムを設定することが効果的といえる。また、「作成」、「指導」にあたり、以下の理解を深めてもらう内容とする。

#### ○ケアマネジメントに対する理解

福祉用具個別援助計画もケアマネジメントの中に位置づけられ、またそこに基づいて作成されることで効果を発揮することから、ケアマネジメントへの理解を深める内容とする。

#### ○アセスメントの重要性の理解

アセスメントとは福祉用具を選定するにあたり必要な情報であり、解決すべき課題が何かを考えるための材料である。利用計画、機種選定の前提にアセスメントがあることを理解してもらう内容とする。

#### ○モニタリングの必要性の理解

事故防止や、利用者の安全・安心な福祉用具利用のために、モニタリングが必要だということを理解してもらう内容とする。

#### ○PDCAサイクルの必要性の理解

福祉用具個別援助計画書の作成およびモニタリングが来年度施行の改正指定基準で義務化される流れだが、同計画とモニタリングによって福祉用具のPDCAサイクルが確立され、利用者の安全・安心な福祉用具利用につながる旨を理解してもらう。

#### ○チームアプローチの視点

「ケアマネジャー対福祉用具専門相談員」でなく、サービス担当者会議を意識した、チームアプローチの視点でのプログラム・教材作成とする。

### (5) 研修プログラム

研修は全7時間とし、講義（3時間）、演習（4時間）のプログラムとした。

#### 1) 講義（3時間）／「個別援助計画」作成技能の習得と、指導技術

リーダーとして個別援助計画の普及に資することができるよう、同計画の意義と目的および、その作成技術を習得するとともに、地域における研修会の企画・運営技術を学ぶ講義とした。

#### 2) 演習（4時間）／事例をもとにした実際の個別援助計画書の作成

実際に同計画書に落とし込むことで作成技術の習得を図る内容とした。各自が普段使っている福祉用具カタログを持参してもらい、課題事例をもとに、グループワーク形式で意見交換を行った。

### 【演習の目安】

- ①事例説明（利用者の基本情報、ケアプラン、住宅見取り図、個別援助計画書）【30分】
- ②事例に関する質疑応答、オリエンテーション（グループワークの進め方）【5分】
- ③グループワーク【120分】
  - 司会進行、書記、発表者を決める
  - 自己紹介
  - グループでワークシート（ニーズ、利用目標、選定機種、選定理由、留意点）を作成（受講者は各自カタログを持参）
- ④ワークシート回収、アンケート記入【15分】
  - 運営側は、この間に各グループのワークシートをコピーし、配布
- ⑤発表（5～10分×グループ）【60分】
- ⑥講師による総括【10分】

## （6）研修教材

### 1）研修テキスト

研修教材として、本事業ではテキストの開発を行った。前述Ⅱ－1－（3）「研修プログラム・教材の作成」にあるポイントを踏まえ、リーダーとして習得すべき内容として、以下の項目を設定した。

#### 【テキストの項目】

- ・ケアマネジメントと福祉用具導入プロセス（PDCAサイクル）の理解
- ・福祉用具のアセスメント及び目標設定の重要性の理解
- ・個別援助計画の構成要素と内容の理解
- ・安心・安全に福祉用具を使用するための指導、リスク管理、モニタリング
- ・研修会の企画・運営

### 2）研修教材

研修会の実施にあたり、以下のとおり、研修教材を準備した。これらの教材のほか、担当講師の副教材を配布した。

#### 【講義】

##### ■教材1／普及リーダー養成研修テキスト

リーダーとして福祉用具個別援助計画書の普及研修を行う際に、共通知識を持てるよう、また、作成技術と指導技術の補助となるよう開発したテキスト。講師の副教材とともに、講義教材として活用した。

## 【演習】

### ■教材1／利用者の基本情報

演習で使う事例となる利用者の基本情報が記載された資料。「利用者基本情報」「相談内容・主訴」「身体状況（ADL等）」「課題（ニーズ）」から構成されている。演習を行ううえで利用者の状況等をイメージしてもらうための資料として活用した。

### ■教材2／利用者のケアプラン

演習で使う事例となる利用者のケアプラン。第1表～第3表を教材とした。グループワークでは、この教材の「援助目標」や「課題（ニーズ）」等を踏まえて検討を行ってもらった。

### ■教材3／利用者の住宅の見取り図（ビフォー）

演習で使う事例となる利用者宅の間取り図。福祉用具を導入する前のもの。

### ■教材4／利用者の福祉用具個別援助計画書（基本情報）

ふくせん福祉用具個別援助計画書の様式左側。演習で使う事例となる利用者のアセスメント情報が記載されたもの。

### ■教材5／ワークシート（福祉用具個別援助計画書（利用計画））

ふくせん福祉用具個別援助計画の様式右側の白紙フォーマット。教材1～4をもとにし、意見交換。各自が持参したカタログから福祉用具を選定し、選定機種およびその選定理由、使用上の留意点を記載してもらった。

### ■教材6／作成済みの福祉用具個別援助計画書

演習の最後に参考資料として提供する「福祉用具個別援助計画書」。課題事例が実際のものに基づいているため、実際に行った福祉用具専門相談員の対応を記載し、記入例として持ち帰ってもらった。

### ■教材7／利用者の住宅の見取り図（アフター）

演習の最後に参考資料として提供する見取り図。教材6と同じく、実際の対応に基づいたもの。

### ■教材8／作成済みのモニタリングシート

演習の最後に参考資料として提供する「モニタリングシート」。教材6に同じく実際の対応にもとづいたもの。計画の実施状況の把握を行った際の記録を参考として持ち帰ってもらった。

## （7）研修の運営

本事業では、今回の研修が適切に実施できるよう、「研修内容検討部会」と相談のうえ、以下のような活動に取り組んだ。

### ①事業説明会の開催

本事業では、今回の研修を円滑に実施できるよう、実施地域の協力団体の担当者を集めて、事業説明会（10月17日）を開催した。事業説明会では、研修の実施要領に基づき、今回の研修内容の説明、意見交換を行った。また、協力団体に対して助成事業の趣旨を理解していただき、可能な限り、地域における関係者・団体等との連携・ネットワークづくりに取り組んでもらうよう要請した。

### ②テキストの開発

本研修では、受講者がリーダーとして福祉用具個別援助計画書の普及研修を行う際に、共通知識

を持てるよう、また、作成技術と指導技術の補助となるよう、テキストの開発を行った。テキストの開発にあたっては、委員会での討議を踏まえ、「研修内容検討部会」が具体的な内容の検討にあたった。執筆は、研修内容検討部会員のほか、専門知識を持つ有識者に依頼した。

### ③研修講師の選定

本研修では、プログラム、教材等の作成に携わった本委員会の委員に講師をお願いするほか、実施地域における事業の定着を期待し、協力団体からの講師選定もお願いした。なお、地域の講師が講義を適切に行えるよう、事前にプログラム、教材を提供した。

### ④広報活動、マスコミ等への協力依頼

本事業は、モデル研修の普及、啓発を目的としていることから、本会のホームページに特設ページを設けてパブリシティ活動を積極的に行った。研修を実施した後、内容を伝えるためレポートを作成し、実施地域、全国の関係者に研修の内容を伝えた。

また、マスコミ各社にも適宜情報を提供し、パブリシティへの協力を求めた。この結果、シルバー新報（2011年12月16日発行 第6面）、シルバー産業新聞（2012年1月10日発行 第2面）に、研修記事が掲載された。

### ⑤受講者名簿の公表

本会では、本研修修了者の名簿を管理するとともに、本会ホームページに修了者の名簿を掲載した。研修修了者が、福祉用具個別援助計画書の普及を図るリーダーとして活動していくにあたり、研修修了後もモチベーションを保つ一助となるよう、また、地域や職域で活躍する際の環境整備の一環として行っている。なお、今後、地域で活動を行ってもらうにあたっては、要請があれば資料提供等の開催支援を行う。

（名簿掲載ページ URL : [http://www.zfssk.com/sp/1111\\_model/f.html](http://www.zfssk.com/sp/1111_model/f.html)）

## 2. 各地の研修レポート(個別援助計画の普及研修リーダー養成研修)

### (1) 大阪会場(個別援助計画の普及研修リーダー養成研修)

実施体制	主催／一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会 協力／公益社団法人関西シルバーサービス協会
日時	平成23年11月19日(土) 9:30～16:30
場所	大阪社会福祉指導センター 4階 研修室1
参加者等	参加者49名、講師3名、運営スタッフ10名(役員含む)
講義概要	①時間／9:30～12:00(2時間30分) ②内容／「福祉用具個別援助計画書」の作成技能の習得と指導技術 ③講師／東島弘子氏(国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師) ④教材／テキスト、副教材として講師提供資料。プロジェクト使用。
演習概要	①時間／13:00～16:30(3時間30分) ②内容／事例をもとにした「福祉用具個別援助計画書」作成のためのグループワーク ③講師／淵上敬史氏(作業療法士、株式会社ウィズ) 一ノ瀬千草氏(理学療法士、総合メディカル株式会社) ④教材／a 事例の基本情報、b ケアプラン、c 図面(前)、d 図面(後) e 事例提供者の福祉用具個別援助計画書、プロジェクト使用 ⑥運営／各6、7名の8班に分け、司会、書記、発表者を分担。講師が事例内容を教材 a、b、c で説明。班ごとに討議し、計画書を合同で作成。各班の発表に講師が講評を行い、最後に事例提供者の教材 d、e を提供した。

#### 1) 取材レポート

適切な「福祉用具個別援助計画書」の作成環境の整備に必要なのは、同計画の作成技術のほかに、地域や職域において、研修を企画・運営、さらには講義も行える人材の育成である。本研修は、このような趣旨で研修リーダーの養成のために開催したものである。同研修は大阪と東京の2カ所で開催したが、第一弾となった大阪会場には、49名の福祉用具専門相談員の参加があった。地域、職域のリーダーとしての自覚もあるのか、真剣に耳を傾け、熱心にメモを取る姿が印象的だった。配布資料になかった講師の副教材について、事務局へ提供要望が多くあがるなど、参加者の意欲が感じられた。

#### 講義 「福祉用具個別援助計画書」の作成技能習得と指導技術

#### 福祉用具貸与を“モノの提供”ではなく“サービス”とする「個別援助計画」

講師の東島弘子氏(国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師)が参加者に質問した。「福祉用具を利用





する目的とは何か？」。参加者2名の答えを聞くと、「自立支援に向けて要介護状態を悪化させない、改善する、生活レベルを上げるため、またリハビリテーションの観点から使用するもの」「利用者の生活の維持、向上」であった。そして、東島氏は、これらの目的を実現するために必要なものが福祉用具個別援助計画であるとしていた。「福祉用具個別援助計画は、まさに、自立支援のため、利用者の状態の維持・改善のため、リハビリテーションや利用者支援の観点から必要なのです。個別援助計画を作成するのは、初めての場合は特に負担でしょう。義務化したから仕方なくやるのだということでは、その負担は増すばかりです。なぜ必要なのか。その目的をしっかりと理解して下さい。」

「福祉用具の貸与」とは、モノのやりとりではなく、「福祉用具を通じたサービス」という付加価値が含まれるものだといわれるが、東島氏の定義は「福祉用具を通じてその人の自立した生活を支援する」ことだ。自立した生活というのはADLだけではない。ご利用者の本当の気持ち、ニーズを周囲に主張する事が出来る、ということも含まれる。複数の人間が関わると難しくなりがちなことだが、「サービスの特性」がここで大きな役割を果たす。

サービスの特性とは、次の5つ。

- (1) 無形性
- (2) 生産と消費の不可分性
- (3) 消滅性
- (4) 過程の品質の重要性（福祉用具が利用されるまでのプロセスが大事）
- (5) 異質性（提供者、利用者によって異なる）



サービスとは、目に見えないものであり、見えないからこそ紙に残すことに意味がある。通常、利用者にモノを届けることはできても、そのプロセスは後には残らない。誰が、どのように福祉用具の利用目的を考えて選定したのか、計画書がなかったとしたら誰にもわからないのが現状だ。

厚生労働省の「福祉用具における保険給付の在り方に関する検討会」で、個別援助計画について、「ケアプランに基づき、福祉用具の利用目

標を提案したうえで、具体的な福祉用具の機種・型式やその選定理由、福祉用具使用時の注意点を詳しく記載したもの」と定義している。個別援助計画には利用目標、選定理由、注意点が記載されていなければならないのだ、ということがわかる。

「私が定義する個別援助計画とは、『ケアプランに明記された方針にのっとり、具体的な手順や留意点などを書いた個別サービスの利用計画』です」（東島氏）。

また、「個別援助計画により、福祉用具についての

#### 【PDCAサイクル】

P：計画の作成、D：サービス提供、C：モニタリング、A：アクション。これはサービスの特性と同じであり品質管理に必要。また、Aのアクションはアセスメントでもあり、常に利用者の状況を確認して必要に応じて再度見直しをする。PDCAサイクルはぐるぐると円のようになりその効果を発揮する。

PDCAサイクルが確立されて、自ずとモニタリングが行われ、サービス提供における利用者の個別性が進むことに期待したい」とも。

## 研修リーダーの役割

研修リーダーは、それぞれの会社や事業所内で話し、指導することもあるが、今後期待されているのはそれだけではない。講師がいてグループで話をするときの司会の役目をする、また、セミナー時に講師の言葉を補い、グループワークではファシリテーターの役割を担うことも重要だ。

「自分の言葉や知恵や体験を伝え、分けて下さい。研修リーダーには、個別援助計画の必要性と記載されている項目の意義、特に選定理由と利用目標の記載の仕方の指導を行ってほしいと思います。福祉用具の利用は何のために行うのかということを経験と事例を織り交ぜて、自分の言葉で伝えてくれることを期待します」（東島氏）。

### 演習 事例をもとにした「福祉用具個別援助計画書」の作成のためのグループワーク

「何を」より「なぜか」。福祉用具が利用者の生活意欲の向上につながるようなプランをグループワークの講師は、作業療法士の淵上敬史氏。理学療法士の一ノ瀬千草氏がサポート役を務めた。6〜7名のグループで、提示された事例について検討して、個別援助計画書の利用計画を作成し、留意点を含めて発表。講師からの講評を含め、全体のディスカッションを行った。

淵上氏によると、各グループが作成した利用計画では、選定機種や選定理由に違いはあるものの、生活全般のニーズを落とし込めていた。「どれが正解ということはありません。大事なのは導入後『適切に使用されているか』『ご利用者が求めている自立支援につながっているか』というところの確認作業＝モニタリングです」（淵上氏）。

ご利用者の望む生活と現状との差を把握分析（アセスメント）し、利用計画を作成するのだが、その中の具体的な手段が福祉用具であり、何のために何の機能を使うのかを明確にすることが必要である。それがモニタリングにつながり、PDCAサイクルが回る。

ご利用者の解決すべき課題について、包括的に見るケアマネジャーが気づきづらい福祉用具あるいは住環境に関して特化したニーズを引き出すのが福祉用具専門相談員の役割である。「福祉用具専門相談員がご利用者にしっかり目を向け、傾聴し、人権を尊重するという気持ちを心からもつということも大事です」（淵上氏）。モニタリングと評価を繰り返し、目標の達成度・満足度を確認しながら状況に合わせて福祉用具を見直すことで、ご利用者の望む生活を実現に近づける。そこにこそ、福祉用具専門相談員の専門性がある。

「モノだけのサービスではなく、ご利用者の気持ちや思いを知るといふ $+\alpha$ の知識と技術が必要です。それが信頼関係や安心と満足感をもってもらえる、頼れる真の専門相談員です。個別援助計画書はその材料。その存在によってサービスの質に差が出てきます。福祉用具個別援助計画の作成が義務化になり、その分忙しくなるという意見もあるかもしれませんが、福祉用具専門相談員にとってもこれはチャンスだと思います」（淵上氏）。



### ◆参加者へのインタビュー◆

- まだ福祉用具貸与事業所を立ち上げて半年ほどしか経っていないので、リーダーとしてはまだ難しいかもしれない。セラピストを対象に福祉用具専門相談員についての話をする予定なので、早速そこで活用したい。
- 今回の研修をどう活用していくか考えているところ。長崎県（地方）は中央の情報がなかなか入ってこない。福祉用具貸与事業者への研修はいいとして、ケアマネジャーへの研修は理解が得られるか心配。普段からケアマネジャーに対して福祉用具の勉強会は開催しているので、そのような場でまずは普及に努めることが大事なのかなと考えている。
- 自分たち（介護実習普及センター）が率先して研修を行っていかねばならないと感じている。ただ、福祉用具そのものの知識は少ないので、どう伝えていこうか難しいと感じながら講義を聞いていた。これまでも個別援助計画書の大切さは伝えるようにしてきたが、テキスト等がなかったのでどう教えていいのかわからなかった。このような研修が行われるようになってよかったと感じている。
- リーダーとして、個別援助計画書が義務化になったことや、なぜ作成が大切なのかを伝えていけないと思う。
- リーダーとして、研修のほか、行政機関や各種団体への普及活動を行おうと思う。今回の研修については、グループワークが「計画書の書き方」ではなく「福祉用具の選定」に流れてしまっていたので、もう少し書き方に落とし込む内容を学びたかった。

## (2) 東京会場（個別援助計画の普及研修リーダー養成研修）

実施体制	主催／一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会 協力／一般社団法人全国福祉用具専門相談員協会 東京ブロック
日時	平成23年12月10日(土) 10:00～17:45
場所	コンベンションルームAP 渋谷 8階 A・B会場
参加者等	参加者65名、講師2名、事例提供者1名、運営スタッフ10名(役員含む)
講義概要	①時間／10:00～14:10(3時間)※昼休憩1時間 ②内容／「福祉用具個別援助計画書」の作成技能の習得と指導技術 ③講師／東畠弘子氏(国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師) 成田すみれ氏(社会福祉法人試行会横浜市青葉台地域ケアプラザ所長) ④教材／テキスト、副教材として講師提供資料。プロジェクト使用。
演習概要	①時間／14:10～17:45(3時間30分) ②内容／事例をもとにした「福祉用具個別援助計画書」作成のためのグループワーク ③講師／成田すみれ氏(同上)、花田茂氏(事例提供者) ④教材／a 事例の基本情報、b ケアプラン、c 図面(前)、d 図面(後)、e 事例提供者の福祉用具個別援助計画書 ⑤運営／各5、6名の12班に分け、司会、書記、発表者を分担。事例提供者が事例内容を教材 a、b、c で説明。講師の進行のもと、班ごとに事例を討議し、計画書を作成。各班の発表に講師が講評を行い、最後に事例提供者の教材 d、e を提供した。

### 1) 取材レポート（東京）

福祉用具貸与において、サービスの標準化が課題だが、本会の山下理事長の冒頭あいさつでは、「福祉用具個別援助計画書」がその課題解決につながる、とされていた。福祉用具専門相談員一人ひとりが、ご利用者の希望や状態に応じて、個別援助計画書を書けるレベルになる、ということが業界全体の発展に、福祉用具貸与に対する認識の向上につながる。しかし、それを全国区に広げるためには、各地に“リーダー”が必要となる。東京会場の参加者は65名。多数の応募者の中から、大阪、東京の2会場を合わせて、全県から参加者ができるように、人数調整を経ての開催となった。

#### 講義 「福祉用具個別援助計画書」の作成技能習得と指導技術

##### 指定基準において初めて問われる福祉用具サービスの“質”

「この研修が終わったときに、福祉用具の利用の目的を自分だったら何と言うだろうか、と考えてみてください」講師の東畠弘子氏（国際医療福祉大学大学院福祉援助工学分野講師）は言う。福祉用具の貸与・販売には、モノのやりとりではなく、



福祉用具を通じたサービスという付加価値が含まれている。そこになくってはならないもの、それが「説明」である。何のために、福祉用具を使うのか、なぜ“その”用具なのか。ご利用者やご家族はもちろん、連携の必要性が求められている多職種に対してもわかってもらえなければ、どんなに適切な福祉用具を選定しても効果が期待できないこともある。

“人”を相手にする以上、決まった説明ですむわけではない。その場面や相手に応じて、必要な工夫をして“伝える”。頭で理解してはいても自分の言葉で表現するのは、難しいことである。明文化するのならばなおさらだ。

東島氏が定義する個別援助計画書とは、「ケアプランに明記された方針にのっとって具体的な手順や留意点などを書いた個別サービスの利用計画」である。そもそも福祉用具の利用目的とは、福祉用具を通じてその方の自立した生活を支援すること。



「Aさんというご利用者に対して、みんなが同じ提案をするわけではありません。人によって異なる提案をすることもあるでしょう。そして通常は、どのような理由でその福祉用具を選んだのか、提供するにあたっての“想い”は、形として残りません。サービスの特性の一つである“消滅性”ゆえに、といえるでしょう」（東島氏）。

誰がどのような目的でどのような利用目標を設定したのか、福祉用具として何のどの機種を選定したのか。これらはモニタリング時に実際の利用状況等をチェックする場合、必要となる情報だが、個別援助計画書がなければ評価が困難となる。導入時に選定し納品した担当者とモニタリングを担当する者が同一だとは限らないからだ。これまでの調査では、モニタリングの際の不具合のチェックなどには福祉用具専門相談員としての経験が大きく影響するのでは？という結果がでていいる。しかし、経験が浅い新人職員でも、ベテラン職員でも必要な情報が揃った計画書があり、読み取ることさえ出来れば、モニタリングやアセスメントの標準化につながっていくだろう。

## 研修リーダーとして業界全体のスキルアップを担うために

「今日の講義には2つのポイントがあります。1つは、個別援助計画の記載内容について。もう1つは、みなさんがリーダーとして研修で話す場合にどこに気をつけて話すべきかというポイントについて。それを持ち帰って下さい」（東島氏）。



“研修リーダー”には、様々な役割が期待されている。職場や地域で自らが講師となり研修会を開催する。セミナー等のときには、講師の言葉を補い、講師と参加者をつなぐ役割。グループワークの時は牽引役となり、全員が発言できているかどうかなどのチェック。また、アドバイザー役として、経験にもとづく知恵を提供したり、終了後に振り返りをうながしたり、など。

「個別援助計画の作成は、慣れるまでは時間もかかるでしょう。仕事が1つ増えることになったと感じる人も多いかもしれません。しかし、それがどういう意味をもつのか、なんのために必要なのかを今日の参加

者のみなさんが伝えて下さい。福祉用具貸与に関して、指定基準のなかに初めて“質”が問われる項目ができたというのは大変重要なことなのです」(東島氏)

## 演習 事例をもとにした「福祉用具個別援助計画書」の作成のためのグループワーク

### 重要なのは“情報収集力” “提案力” “コミュニケーション力”

グループワークの講師は、社会福祉法人試行会横浜市青葉台地域ケアプラザ所長の成田すみれ氏。

5～6名のグループで、提示された事例について検討して、個別援助計画書の利用計画を作成し、留意点を含めて発表。講師からの講評を含め、全体のディスカッションを行った。

検討に入る前段階で、事例提案者に対し、アプローチの寸法などの詳細な情報について多数の質問が出るなど、情報収集の視点について、経験値の高さ(福祉用具専門相談員としてのキャリアが8年～22年のベテランが多数)がうかがわれた。

意見交換も非常に活発で、異なる意見がでて「それでは〇〇ということも考えてこのように提案してみてもどうか？」など具体的な提案方法を出し合っていたのが印象に残った。

司会役となった者は、グループのメンバーに順番に発言を促すほか、提示されている課題ごとに議論する、用具ごとに議論する、など進め方はさまざまながら、どのグループも黙りこんでしまうことなく、それぞれにリーダーシップを発揮して議論をすすめていた。

### 研修を主催する、講師となって指導することも視野に

成田氏からは、実際に研修会を行う際の留意点の説明もあった。シラバスの明確化や形式(座学、演習・使用体験等)の検討に始まり、テキストなどの資料を用意する上での注意点や、受講者と講師双方に対して、それぞれどのような配慮が必要かなど。

「リーダー層から講師を輩出することも視野にいれましょう。時間はかかりますが、業界・団体として、とても力強いことです」(成田氏)。



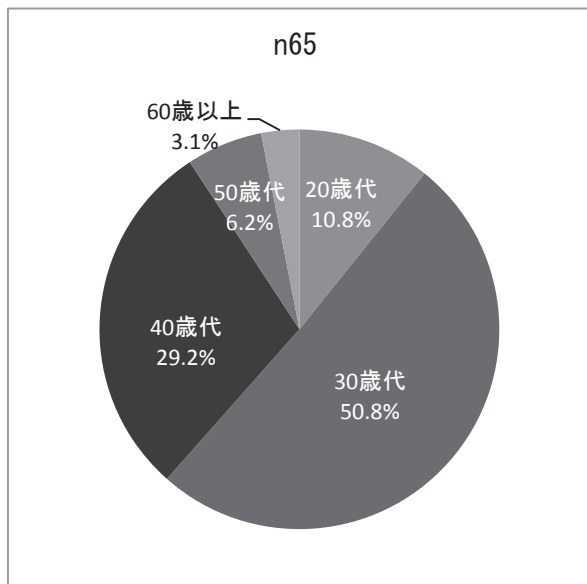
### ◆参加者へのインタビュー◆

- 普段は管理・指導的立場にすることが多くなっているため、新鮮。参加者の方々が熱心、意見がすごく出て感心している。
- 車いす一つとっても非常に多機能・高機能になっており、現場で使いこなせていない状況がでてきている。通所施設等に行き、職員全員を集めて説明したいと思うことがあるが、実際にはそういった機会をつくることは難しいので残念に思う。
- 同業者と意見を交わす場はほとんどないので、大変勉強になった。
- グループワークでは様々な意見がでたが、実際には、機能で勝っていても“変える”ことは非常に難しい場合がある。ご本人の好み、慣れやその他の様々な要因で導入できない場合も多い。自分の経験や知識を100%生かしていないと感じることもある。
- データ上では不便に見えることでも、解消することで自立を妨げたり、意欲をそいだりすることがあるかもしれない。過剰な提案とならないよう注意すべきだと改めて感じた。
- 各県から参加しているため、地域性の違いをすることができ、興味深かった。
- 機種は違っても選定のポイントとなった機能が同じだと、「これは本当に必要とされている機能なのだ」と改めて感じる場面があった。

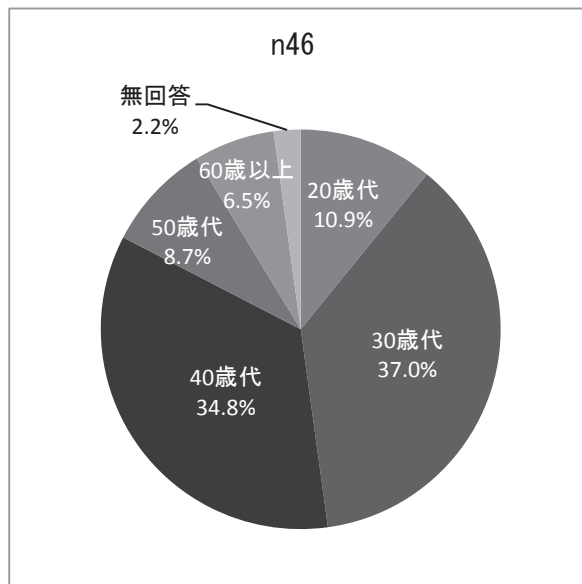
### (3) 受講者アンケートの結果（東京、大阪）

#### 【基本属性】

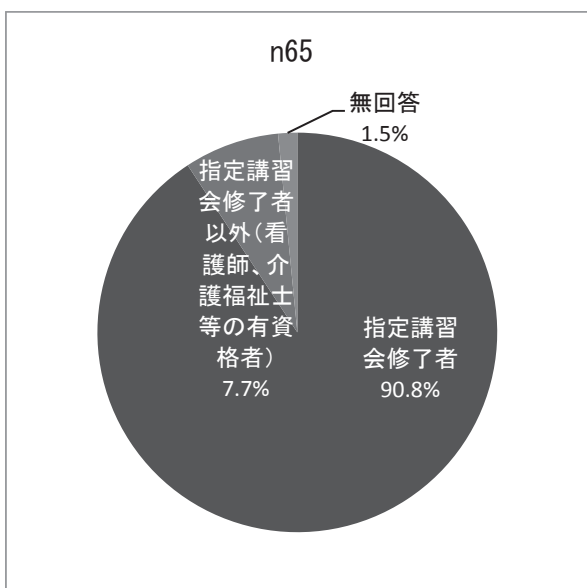
図表 2 東京 年齢



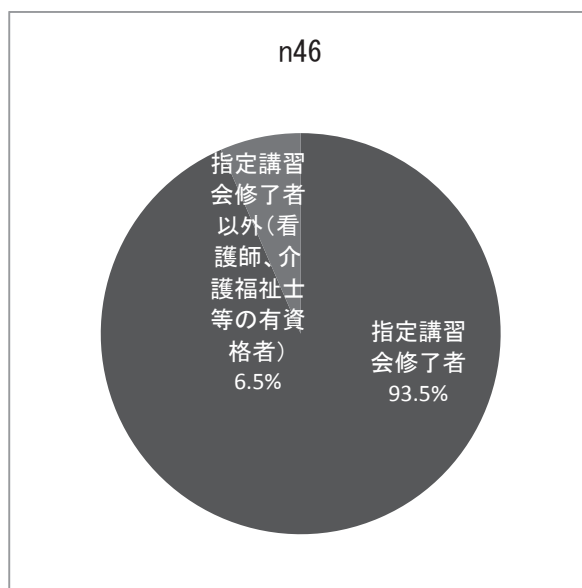
図表 3 大阪 年齢



図表 4 東京 資格取得の方法

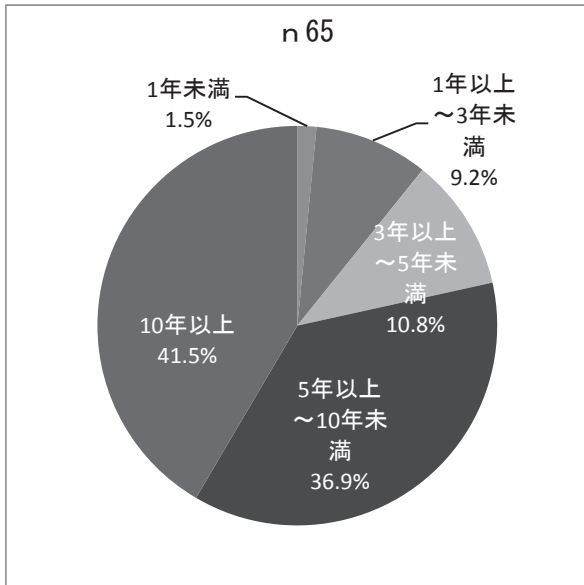


図表 5 大阪 資格取得の方法

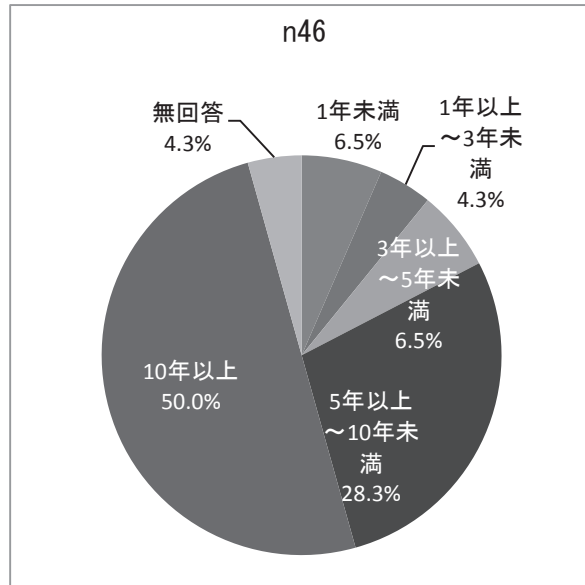




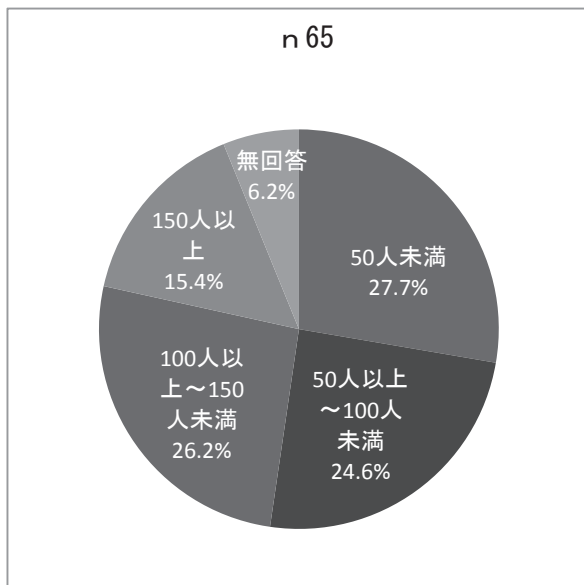
図表6 東京 経験年数



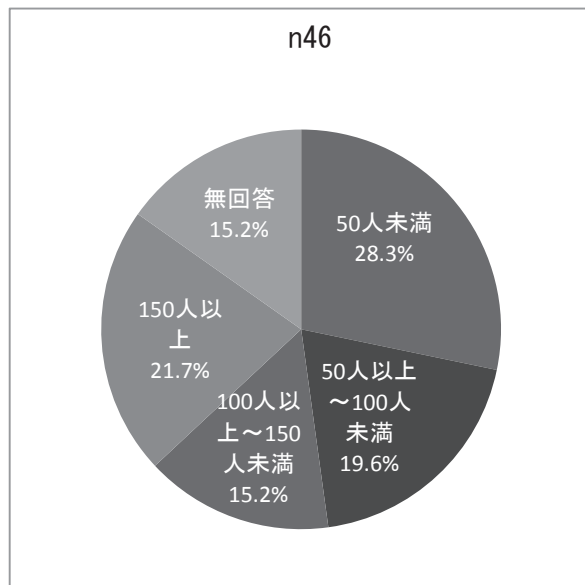
図表7 大阪 経験年数



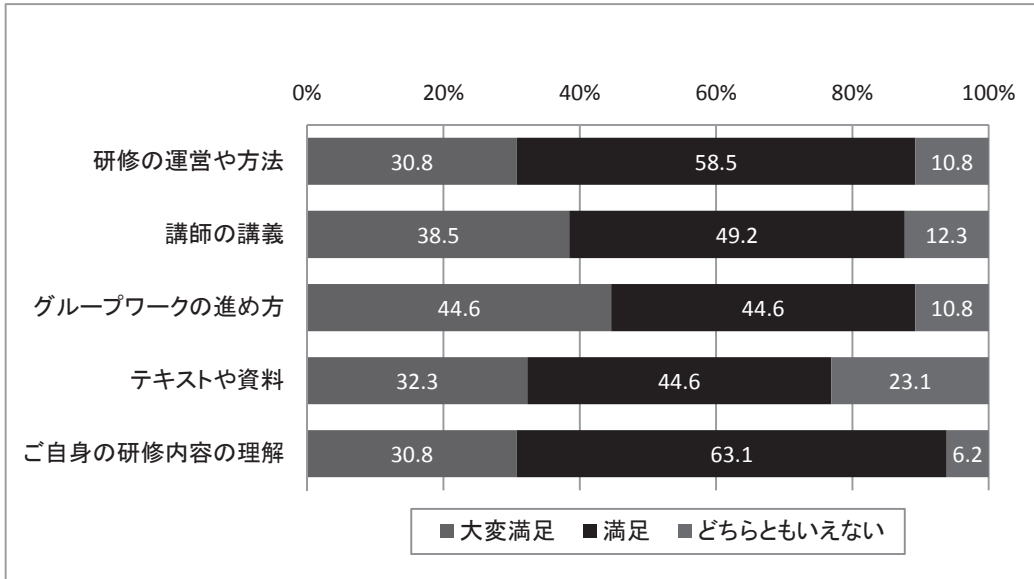
図表8 東京 担当平均利用者数



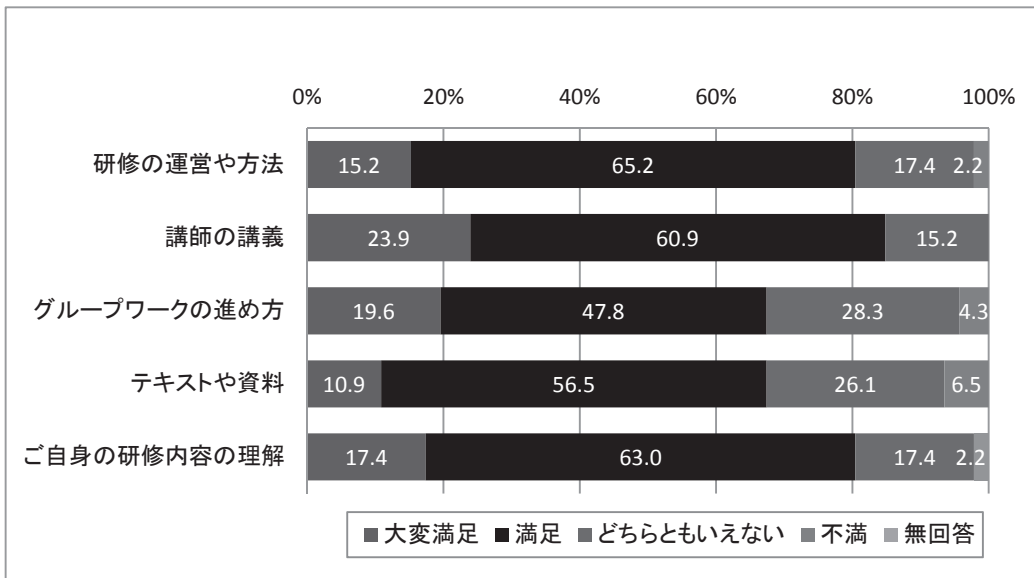
図表9 大阪 担当平均利用者数



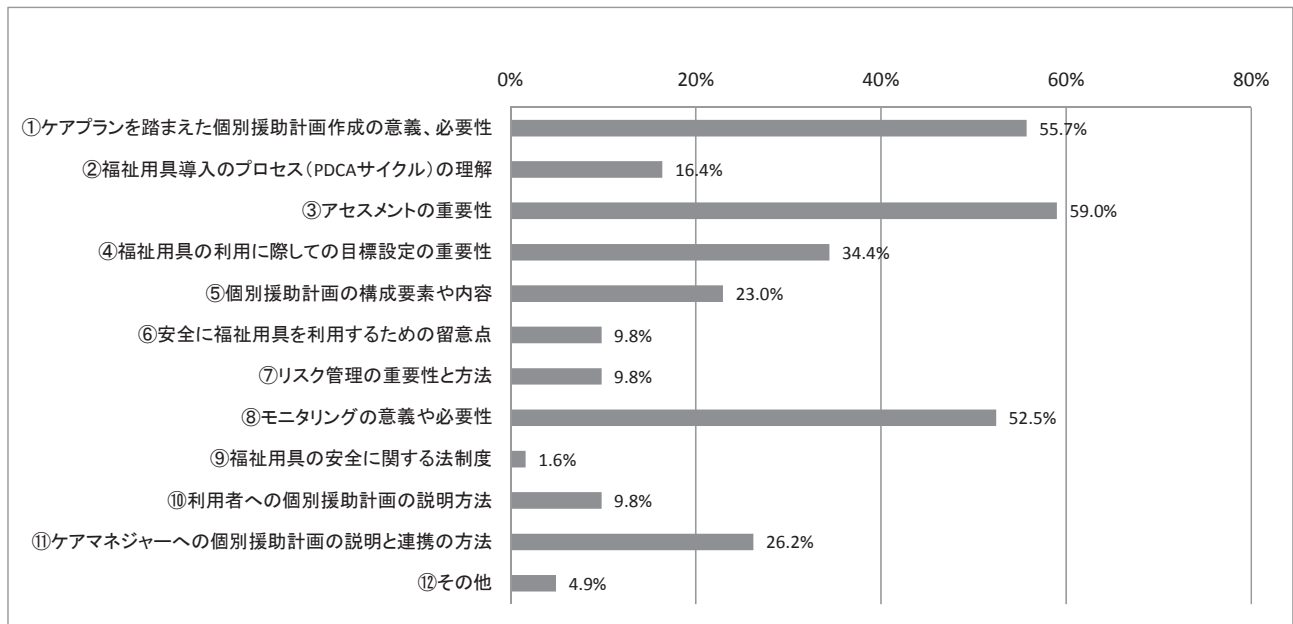
図表 10 東京 研修受講後の感想 n65



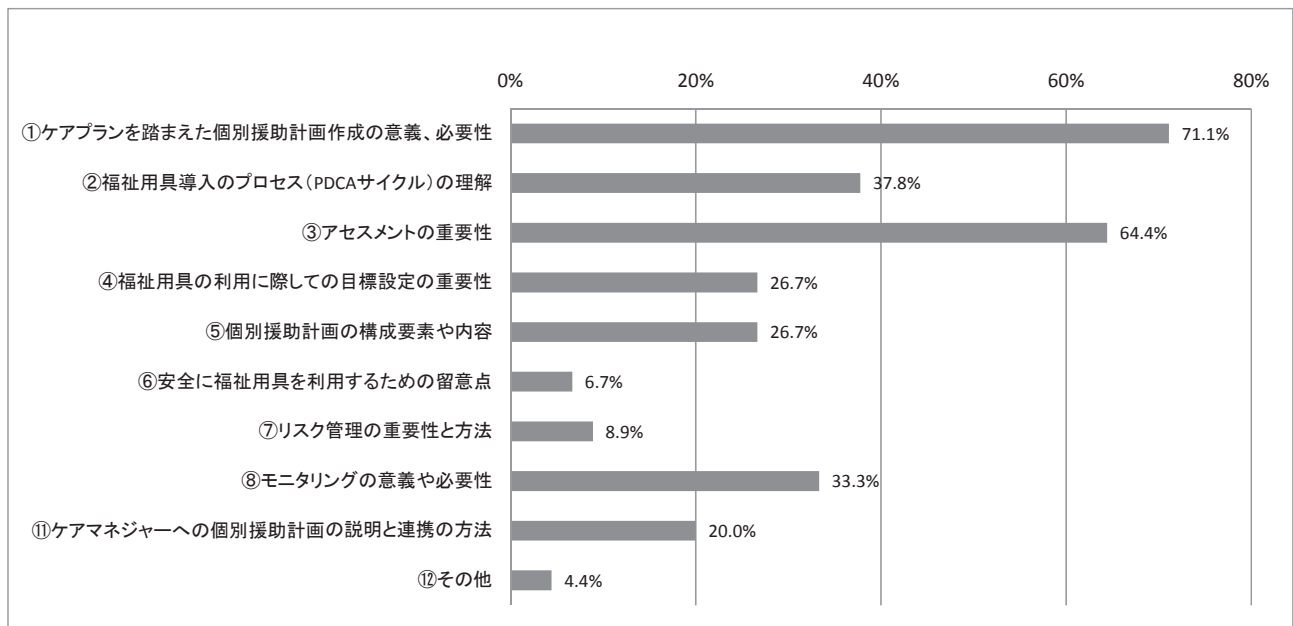
図表 11 大阪 研修受講後の感想 n46



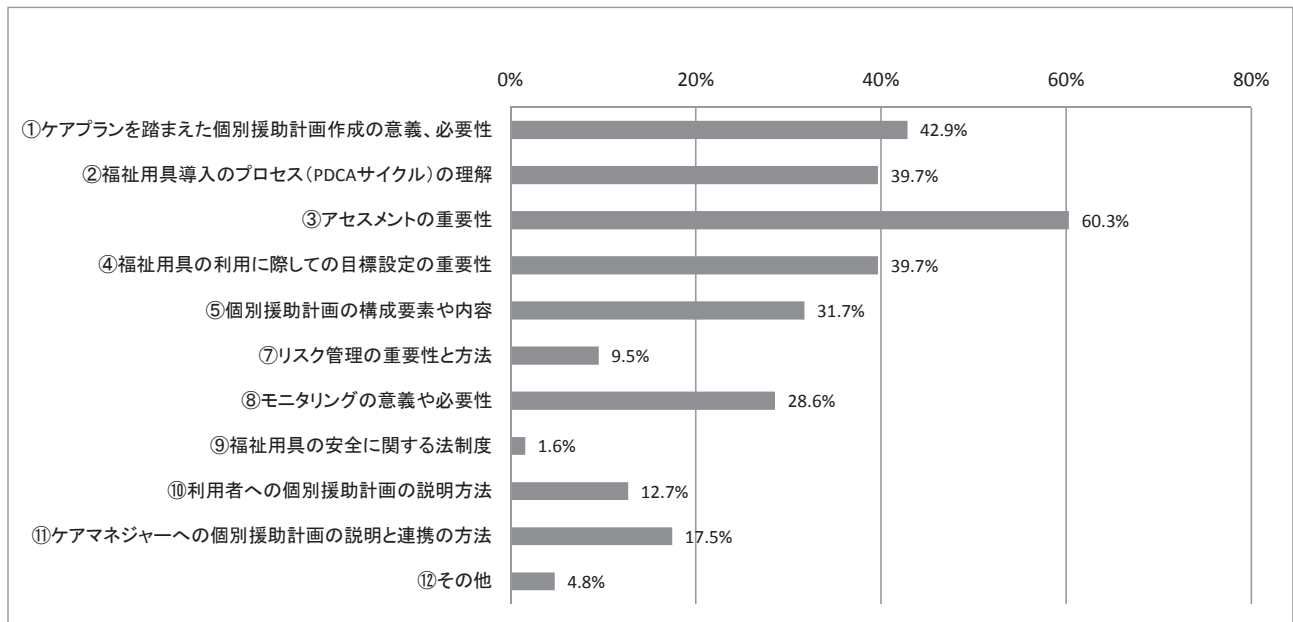
図表 12 東京 職場や地域で伝えたいこと (n61) 複数回答



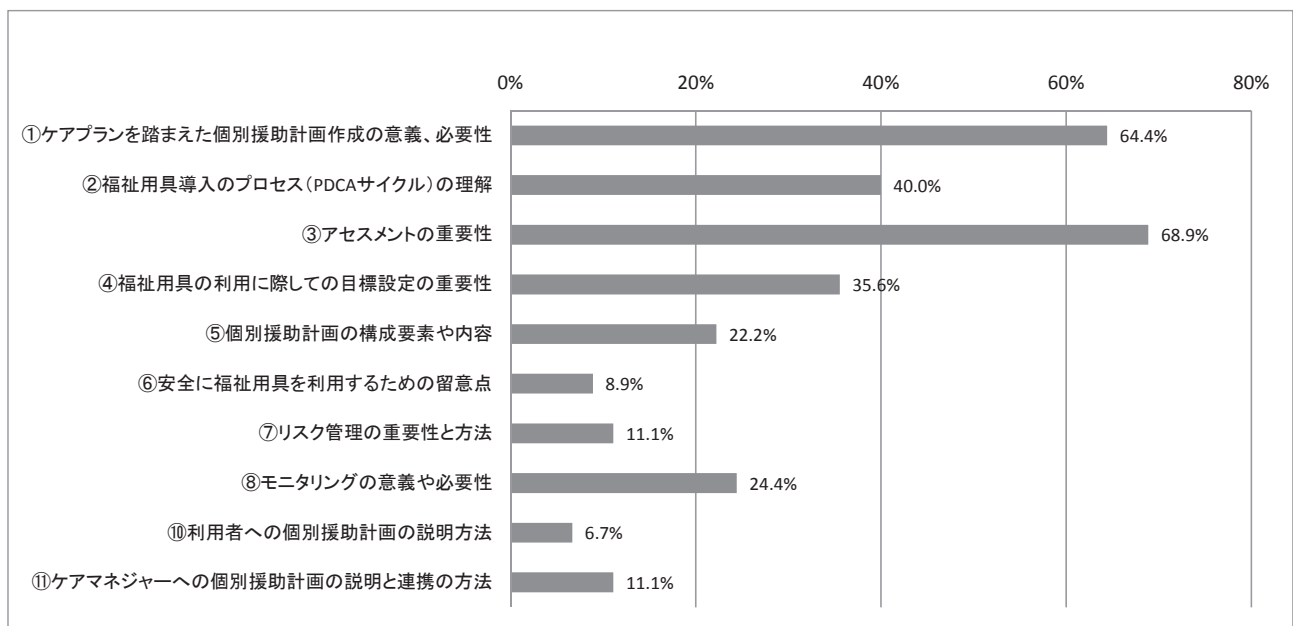
図表 13 大阪 職場や地域で伝えたいこと (n45) 複数回答



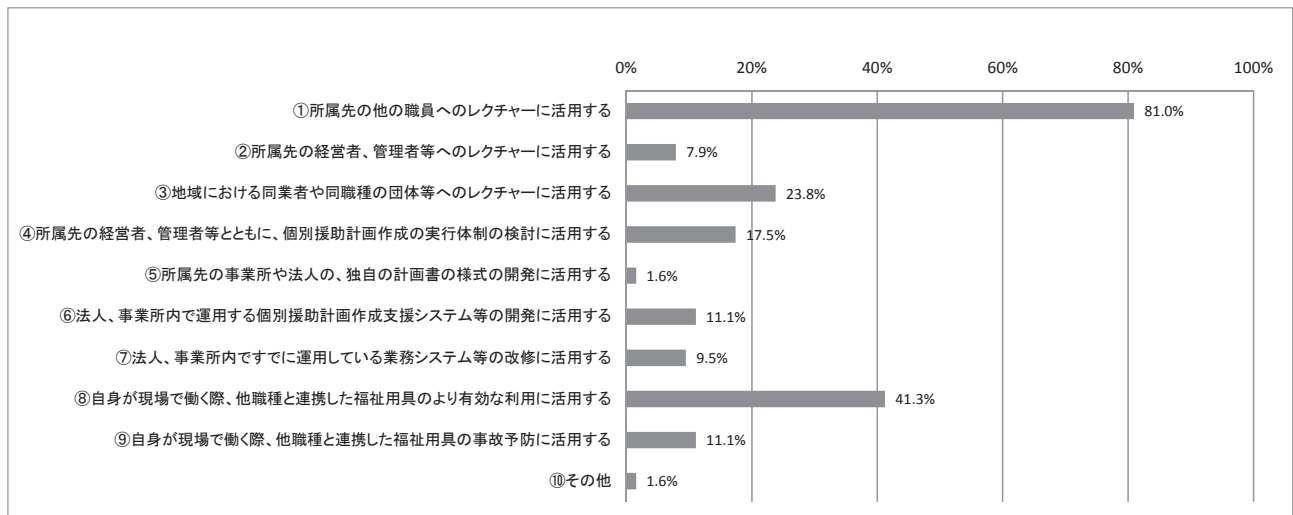
図表 14 東京 特に理解が深まったこと (n63) 複数回答



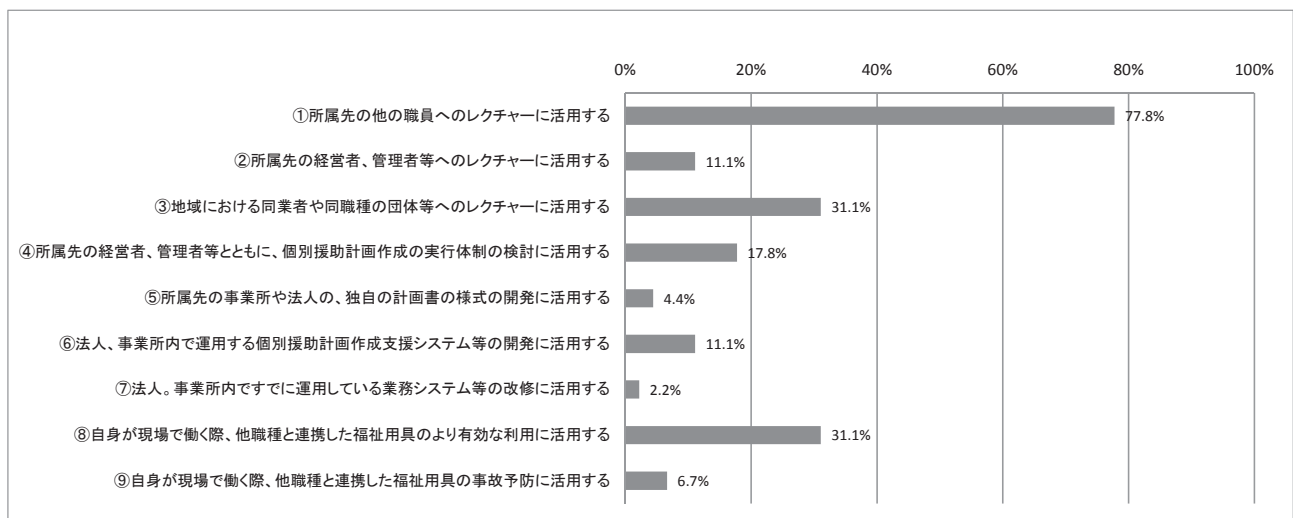
図表 15 大阪 特に理解が深まったこと (n45) 複数回答



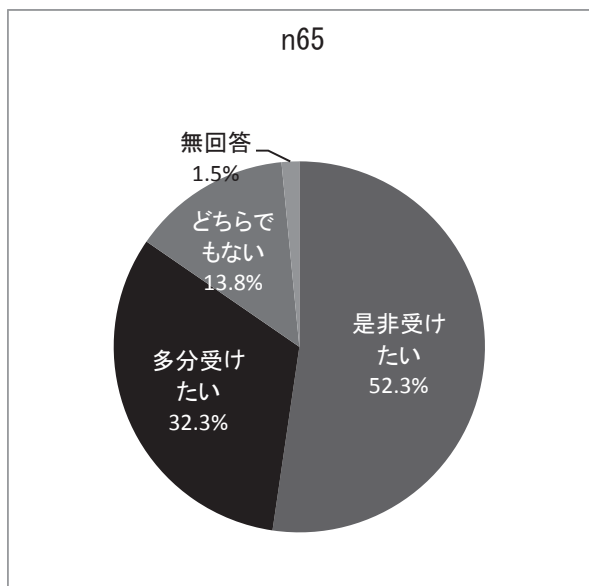
図表 16 東京 研修で得た成果を自身でどのように活用したいか (n63) 複数回答



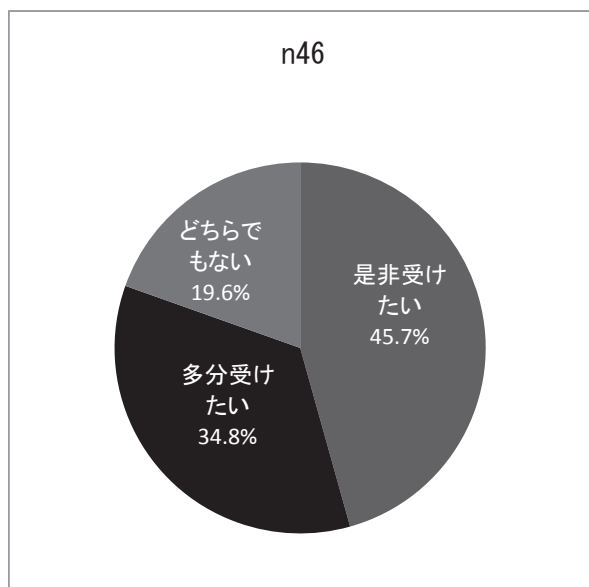
図表 17 大阪 研修で得た成果を自身でどのように活用したいか (n45) 複数回答



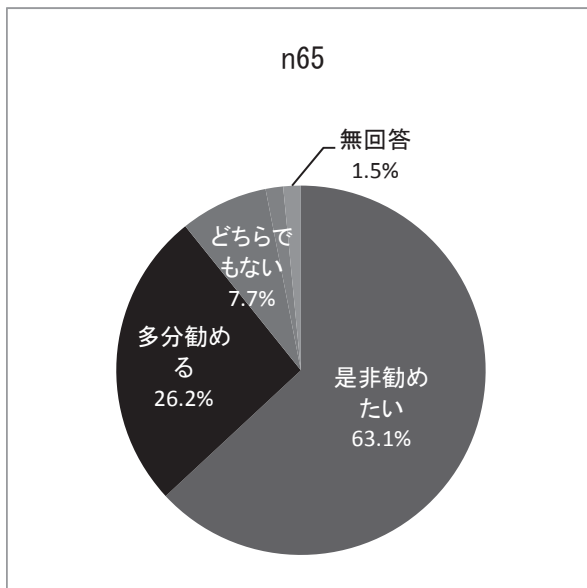
図表 18 東京 このような研修をまた受けたい



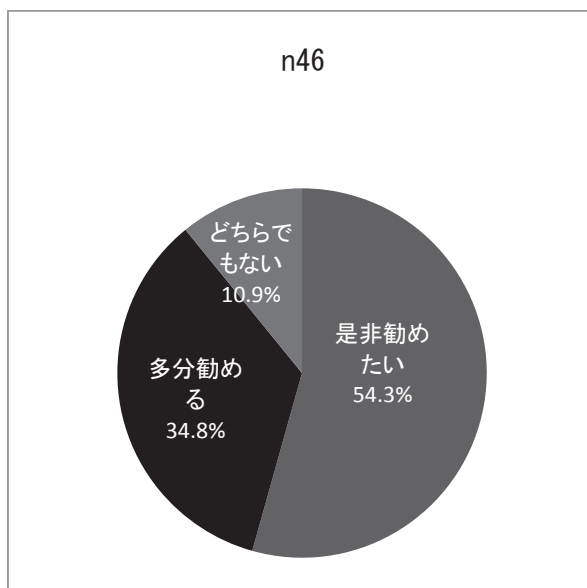
図表 19 大阪 このような研修をまた受けたい



図表 20 東京 研修を他の福祉用具専門相談員に勧めたい



図表 21 大阪 研修を他の福祉用具専門相談員に勧めたい



#### (4) 受講者アンケート 自由記述 (東京、大阪)

##### 【研修の運営や方法に対する感想】

- ・ 時間管理がしっかりしていて運営や段取りは素晴らしかった
- ・ グループや座学が分かれておりメリハリのある研修となった
- ・ 午前中の講義の後にグループワークが計画されており、考えがまとめやすかった
- ・ 研修が講習と事例を交えてなので理解しやすかった
- ・ 講義、演習ともにもう少し時間があるとよい

##### 【グループワークの進め方に対する感想】

- ・ 考え方、目的、商品知識について他の参加者の意識とレベルの高さに驚いた
- ・ さまざまな地域の事情や商品構成を知ることができ、勉強になった
- ・ 時間が十分にあり、自分で考える時間もあり、意見交換や深い検討ができた
- ・ グループで協力しあうことができ、配分よくしっかりでき上手くいったと思います
- ・ いろんな方の意見があり参考になったが、意見がたくさん出たため時間が不足でした
- ・ それぞれの事業所によって扱う商品が違ったり経験年数が違い、意見の統一が難しかった

##### 【テキストや資料に対する感想】

- ・ これからの普及のための道筋がはっきりしているテキストだと感じました
- ・ 要所にワンポイントがあり、実践的であり且つ箇条書きで大変わかりやすく見やすい。参考になります。
- ・ これからの取り組みに役立ちます。持ち帰って再度読み直します。
- ・ シンプルな内容であるがリーダーとしての情報量には不安
- ・ パワーポイントのコピーがあればもっと良かった

##### 【自身の研修内容の理解に対する感想】

- ・ ポイント等の復習によってより理解できるため、改めて復習したい
- ・ 不足している部分がわかりましたので、今後勉強を続けます
- ・ まだ理解すべき点は多いですが、研修を受講する前と比べると全然違います
- ・ 大変有意義な時間だった。周りの参加者に刺激を受けた
- ・ 実施マニュアルが必要かも。
- ・ 理解はできたと思うが、今後普及させていくのにまだ不安があると思います。もう少し研修を受けたいと思いました
- ・ もう少し積極的に発言すべきでした
- ・ 自分も納得し、ご利用者やご家族が理解する文章力、難しさを感じた

##### 【研修会で改善すべきことや、意見・希望など】

- ・ グループワークでする以上、住宅改修を同時に考えるような事例の提供もお願いしたい。また地域で開く上でのアドバイスをいただきたい。今後があればまた参加します。
- ・ 時間を有効に活用したいから泊まりでやってほしいです。いろいろな地域の方と意見交換ができ、



地域性、事業所の事情など話ができて有意義でした。

・一日では時間が不足していると感じました。第2弾があれば是非受講させていただきたいです。事例の数をもっとやれるようにしてほしい。

- ・記載例をいくつか載せて欲しい（パターンや事例）
- ・東京や大阪だけでなく、地方での開催や多くの人に参加できるように回数等を増やす努力をお願いしたい
- ・更なる質の向上に向けて他の法人、他の職種と連携していかなければいけないと思います
- ・研修リーダーを目指し今後ももっと勉強していきたいと思います。まずは社内での研修等をし、会社全体の援助計画のスキルアップ、他事業所への啓発活動をしていきたいです
- ・一回では理解しきれませんし、他者に教えるには時間がかかります。定期開催が必要です
- ・「普及啓発リーダー」養成の研修なので、今後講師として各地域で研修をやるにあたり、初歩的な内容は不要であり、今後はもっとレベルを上げて行ってほしい。グループワークは今更必要ないのではないか？記入のノウハウや活用の仕方など講義を増やしてほしい。
- ・研修会の運営についてももう少しじっくりと受けたかったです

